

# 松山光秀兄の郷土研究を慕って

酒井正子(川村学園女子大学)

2008年3月8日の「松山光秀氏の郷土研究から学ぶ会」では拙い報告をさせていただいた。その報告をもとに、松山さんとの出会いから学んだこと、その著作を使って本土の学生たちに日頃話していることなどを述べてみたい。急逝されて2年。あらためて、私自身の25年のフィールドワークの足跡が、松山さんの教え・導きと、いかに密接に関わって展開されてきたかを痛感する日々である。

松山さんとの出会いは1983年12月29日、小川学夫氏の紹介による。国民宿舎「汐路」を訪ねてきて下さった。さっそく12月31日夜手々で正月歌をうたいながらおこなわれる、大晦日の「カマモーイ(家まわり)」に連れて行ってもらった。

話はずむと夢中で、2時間、3時間とすぐたってしまう。色々案内していただいたが、このままではいわゆる「松山ワールド」から一步も出られず、その手の内で踊っているだけだ。これではいけない。役場のお仕事も忙しいので、自力で歩いてみようと思い、伊仙町目手久に住み込むことにした。84年正月に男女の集団の歌合戦が熱っぽくおこなわれていたシマである。以来、徳之島町井之川と往来しつつ、ヒギヤ(東間切)と伊仙方面を対比して考えるようになった。

1988年ころだったと思うが、サカ歌について松山さんの解釈に疑問を持ったことがある。

ムズや死んだかの 生まれ稲刈りが

吾ぬは奥山に きりし又なりが [徳之島の民俗1-p.146(以後巻と頁数のみ記す)]

この下線部を、「いとしい人は死んでしまったのに」と従来は訳されていたのだが、目手久の田植歌に類似の歌詞があり、「しんだか」は「新田」の意味である。「たか」とは「田圃」のことではないですか、と初めて異議を唱えてみた。松山さんはしばらく考え込んでいたが、その後は「あの世の田圃」と訳されるようになった。「死んだ」という標準語の表現より、この方が的を射ているのはあきらかだ。以来、私の意見にも耳を傾けて下さるようになったと思う。相変わらず調査中に困ったこと、わからないことがあると駆け込む、という日々は続き、まさに「徳之島のお父さん」として、調査全般の庇護者になっていただいたことは、感謝してもしきれない。



徳之島での私の研究は『奄美歌掛けのディアローグ』（第一書房、1996）にまとめた。あそび（男女集団の掛け合い歌）→ウワサ→死の順に考察を深めていったわけである。私たちはまず「集団の掛け合い歌（正月歌、田植え歌、七月踊り歌、キョーダラなど）」の真髄は男女のエロスにある、という点で意気投合した。これまであまり言われてこなかった視点である。次に「ウワサ歌」だが、一節ごとに人の名前を織り込んでゆく曲種があることを確認したのは、私独自の発見によるものだと思う。これは目手久の方々に感謝したい。そして「死」については、全面的に松山さんの「徳之島の葬制」とクヤのご報告に依拠した。以下のような記述には胸うたれるものがある。

・・・この世の最後の分かれのときであるので人々はいたく悲しみ、ときには泣きじゃくる声も混じる異様な雰囲気（クヤは）歌われる。・・・遺体の手を揉みながらイギャネイ（しのびごと）を語りかけたりもする。・・・クヤの荘厳な響きがバックに流れていないと、イギャネイや泣き声も死者を送る厳粛なムードを帯びることができない。このようにみえてくると、クヤは荘厳な響きをもつ歌いとイギャネイと泣き声の三者が渾然一体となっはじめて死者を供養する力となり得るということもできる。このような雰囲気は実際の場合に入ってみないと理解しがたい側面がある[1-121~125]。

幼いときお姉さんを亡くされ、葬儀の場にごうごうと鳴り響くクヤが身に染みついて離れない、と話されていた。こうした場合は今日ほとんど見聞きすることはできず、松山さんのご報告の中にかろうじて生きているわけである。病人のトゥギに関しても貴重な報告をなさっている[1-86~87]。

☆

☆

いま、著書2冊を読み返して思うことは、まず第一にシマで生きる実感、情感、ファンタジーにあふれていることである。

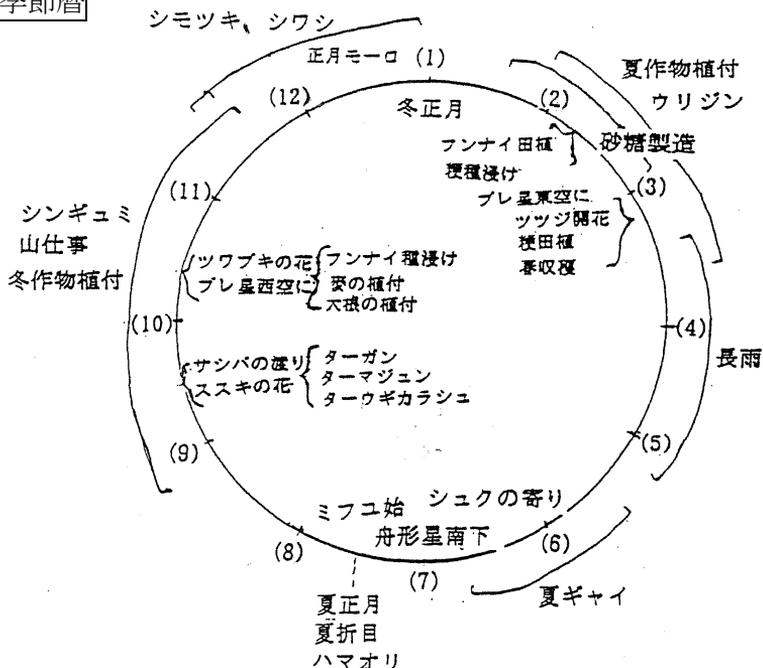
とくに「シマの四季」[2-101~143]は詩情豊かで、しかも単なるノスタルジーではない。ご両親からの聞き取りをもとに、シマの大地にしっかりと根をはった確固たる生活が再現される。お父様は「のどかな日和に遠くから流れてくる田植歌の音はなんともいえない心地よいものであった。自分も一生に一度は田植歌をさせようと志していたが、面積が狭く果たし得なかった。心残りだ」と常々話されていたという。

往時は暦に頼らなくとも、星の運行やツツブキの開花などで農事の頃合いを知った。「水稻フンナイの栽培周期」は、そうしたサイクルを図式化したもので[2-57]、手書きの図が『徳之島の民俗文化』（南方新社、2009）にある。いつごろ作成されたものかはっきりしないが、1988年7月16日の東京大学東洋文化研究所での報告資料に、集大成の図がある（添付）。私は琉球弧のまつりを説明するとき、まずこの図を示して、八重山地域との収穫時期の違いなどを話すようにしている。この図に折り込まれたワクサイ（沖縄ではヤ

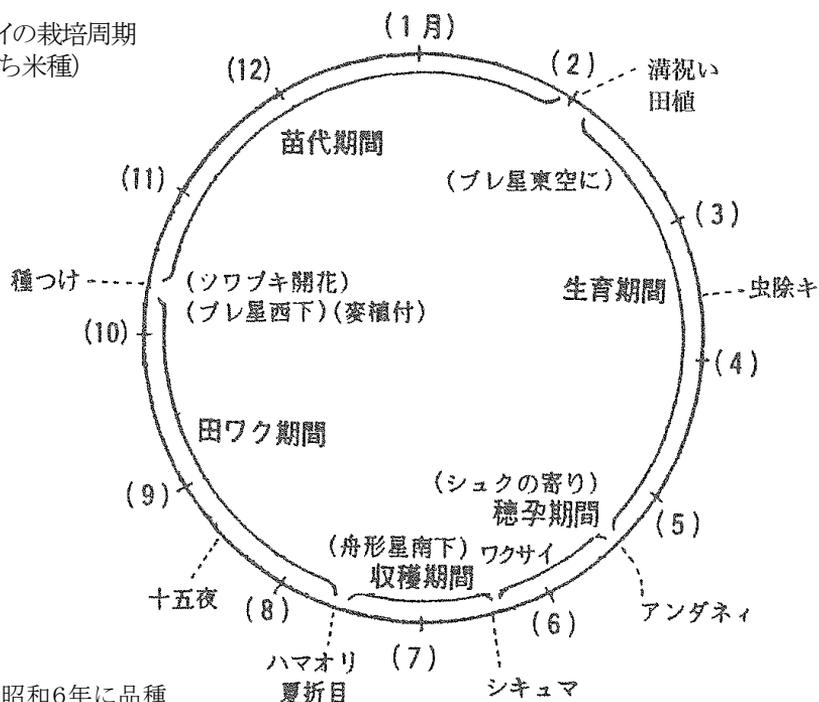
マドゥミ。稲の受精期に鳴りものや歌舞音曲を慎む習俗。これは稲魂を驚かせないための忌み籠もりだという)や、定まった日に海が薄紅に染まる「シュクの寄<sup>ゆ</sup>り」などは、松山さんの名文により広く知られるようになったのではないだろうか。

松山光秀『ワシムラ<sup>の</sup>古図に見るコスモロジー』に関する報告(その1)より  
(科研費重点領域研究「イスラムの都市性」研究報告 第33号、1989)

(図2) シマの季節暦



(図3) 水稻フンナイの栽培周期 (在来のもち米種)



\*うるち米種は昭和6年に品種改良され2期作に(酒井注)

第二に、粘り強い思考と鋭いひらめきであり、それはときに大胆な飛躍、推論に至る。例えば徳和瀬のミキヤミナヌカにおこなわれるシキシカイ(シキ供え)について、「かつてはモヤ(仮小屋)に遺体を安置し、三日目に出してきて埋葬した名残ではないか」とする[1-117]。またハマオリのヤドリで、盃を交わしながら、「この人と自分と先祖が同じだったのかと不思議な感情にとらわれるときもある。現在はあかの他人になっているからである」[1-62]という。そうした考察には、当事者ならではの発想が光っている。ウジョグイ節やヤガマ節の解釈[1-128~132]も、意表を突く興味深いものである。

第三に、優れた文明批評、文化の推移をみる確かな眼が生きていることである。松山さんは終戦後の「伝統的な信仰」の変遷を、3つの段階にわけてとらえている[1-168~169]。

第1段階(~1953年)の米軍統治下では、戦争の異常な状態から脱すると、伝統的な信仰はむしろ強化された。第2段階(~1963年)の日本復帰以後東京オリンピックまでは、復興事業による島の変貌と伝統軽視の時代で、本土との一体化が最も激しく進められた。第3段階(~1968年当時)では、東京オリンピック以後テレビが急速に普及、家庭の中心に居座り、人びとの心の中まで占領してしまった。押し寄せる生の情報と華やかな本土文化に翻弄され、伝統は無視されて「いま、島の伝統行事は風前の灯火」だという。自動車の強力なライトはケンムンの灯りなど吹き飛ばしてしまう。昔、半日も歩いてたどりついた奥山は、車ではたった20分。もはや「奥山」ではないし、機械的な騒音がどこに行っても鳴り響いている。「現代はすでにカミを見る時代ではなく、カミをつくり出せる時代でもない。シマの固有の神たちは、カミを経験した人びとの心の中にしか生きていない。それを探り出すことは、現在に至る我々の文化の流れを認識し、将来への指針を得るために大切なことだ」と結んでいる[1-203]。

同様にクヤも65年頃より、神官などの葬儀への関与が強まる中で次第にうたわれなくなる。また減反政策による砂糖キビへの転作は70年代に徹底されたと聞かすが、粗放的なキビ作は「ついに農民の心の反映としての儀礼も芸能も生み出すことがなかった」[1-18]。私は、83年に初めて松山さんに会ったとき「カラオケのマイクをとおすと自分の声あまりに良く響くものだからみな夢中で、シマウタをうたわなくなった」と、しきりに嘆いていたのを鮮明に覚えている。

東京へは空路で片道およそ2時間、「かつての僻遠の島々は、いま首都圏の傘下に入った感が強い。」本土化の波が押し寄せてくるのをひしひしと感じつつも、松山さんは徳之島の特質を説いてやまない。久保けんお氏の「すり鉢の底」のたとえを引用しつつ、南北から流入する琉日の文化を受け止めながら、一步も譲らず独自文化を作りあげてきた「徳之島文化のしたたかさ」を指摘する[1-14]。私も同感である。骨太、したたかな反骨精神、強烈な独自性に加え「奄美のウクライナ」と称される豊穡で多産(2008年の特殊出生率は1~3位)、躍動的なエネルギーは、今後も発揮されていくことと期待している。

参照文献

松山光秀 2004『徳之島の民俗[1] シマのころ』『同[2]コーラルの海のめぐみ』未来社

# 「松山光秀氏の郷土研究から学ぶ会」覚書

本田 碩孝

## はじめに

徳之島町役場の会議室を会場に使わせていただき、「松山光秀氏の郷土研究から学ぶ会」(2009年3月8日<日>、13時30分～17時)を開催したときには思いのほか多くの方々の御出席を賜り、誠に有難いことでした。関係した者の一人として感謝いたしております。徳之島郷土研究会としては盛大な会でした。光秀氏は長年、徳之島町役場の職員として勤務しながら、余暇に郷土研究を重ねられ、その成果を多くの論文や報告で残されました。生前に『徳之島の民俗』2冊にまとめられましたことは関係者には周知のことと思います。他界された後に『徳之島の民俗文化』が発刊されました。発刊に関わりを持たしていただいた者の一人として思うところがありました。

「シマを掘る」は、松山光秀著『徳之島の民俗文化』(2009年、南方新社)の「刊行に寄せて4」の私の題です。その時に思いついた言葉たちは「掘った人」「あこがれの人」「校区の先輩」等々でした。学び、探訪を託しているのは多いと思いました。その中で私ができることは何かを問い続けています。

私は、民話関係項目と光秀兄(親しみをこめて、シマグチのメイである兄を使いたい)がハブに咬まれた体験をもとに詳細に記した「ハブの話」(松山光秀著『徳之島の民俗[2]コーラルの海のめぐみ』未来社、2004年再録、初出原題「ハブ咬傷にまつわる俗信と民間療法」『徳之島郷土研究会報』第5号、昭和47年)をもとにハブに関するアンケートを作成しました。ハブに関する民俗的探訪を奄美ではハブを、本土では蝮を中心に学んでいます。その二つの項目について3月8日の学ぶ会にはプリントを配りました。当日は時間が足りないばかりだと思ったからです。ことわざについても学んでいます。徳之島での採録などはなかなか出来そうにありません。後輩の町田進さんが、当日は松山光秀兄とサカウタ採録に行った思い出(注1)などを語りましたが、ことわざを井之川だけでも500項以上も集録しているのを見せてもらっています。どのように公表するか期待しています。

注(1) 町田進氏は、その時に録音したテープをダビングして2009(21)年10月29日に私にも研究と保存を兼ねて恵贈してくださいました。

## 出逢い

「出逢いは人生をかえる。よき出逢いを」(相田みつを)といわれるような意味があります。私も多くの出逢いと別れを繰り返しながら、今日までの人生を歩んできました。

私と松山光秀兄との出会いは昭和41年の徳之島郷土研究会の発足から間もない頃だろうと思います。学生時代から入会していたからです。正確かどうかははっきりしません。学生生活を千葉県市川市(西千葉駅と東京駅の間)で過ごしました。「学友から鹿児島県はどういうところか。奄美はどういうところか」などと聞かれても説明することが出来ませんでした。それがショックでした。少しずつ奄美諸島のことを学び始めました。

ある日、市内の古本屋を見ていたら、金久正著『奄美に生きる日本古代文化』(昭和37年、刀江書店)を見つけました。売価が1700円でした(当時、1ヶ月の授業料が千円の時代)。安くはありませんが買いました。この本は私にとっての出逢いであり、私の考え方を変えました。「標準語を使いましょう」(方言を使うなど長年指導されてきた)。このことは一体どんなことだったのだらうと思いました。私などは方言劣等感を持っていたからです。文化的に劣るという意識を形成され、さらに貧乏な徳之島に生まれ育ったという劣等感もっていたのです。更に、大学に合格するために2年間浪人していました。その間に自分の入試に必要な学力(知識)のないことにも劣等感を抱いていました。生活はエレベーターボーイの仕事をしながらです(5年間継続。食べられない心配はなかった)。

過去のことはなかなか思い出せないことが多いのですが、光秀兄との出逢いにもいくつか印象に残っていることがあります。他の方々が発表されたのもとそれ程かわらないと思うこともあります。私にとっていくつか違ったと思うことがあります。

1番目は、シマ・島のことを詳しく記録していることは驚きです。私も休日を利用して帰省したときや初任地(昭和44・1969年4月、瀬戸内町立阿木名小学校)からお世話になった8校区などで伝承の記録を試みましたが、感性と表現力の足りなさでしょうか、とても詳しい報告は出来ませんでした。今日でも同じです。それで、できることは何か？私は小学校教員という職業柄もあり、また、下野敏見先生(『南日本の民俗文化』、全25巻発刊中、鹿児島南方新社、2009年開始)との出逢いもあり、民話の採録を中心に民俗文化を学んできました。その成果の一端はシリーズ奄美民話集1『住用村和瀬の民話』・2『吉永イクマツ姫昔話集』(住用村山間)・3『池水ツル姫昔話集』(徳之島井之川)・4『奄美民話ノート』・5『保マツ姫昔話集』(井之川)・6『本田メト姫の昔語り』(井之川)、また、民俗誌も住用村『和瀬民俗誌』等々として出版する機会に恵まれました(いずれも郷土文化研究会や教育委員会。奄美民話集5は畏友加島浩志君が経費負担、後は自費)。

光秀兄は足元を深く掘り下げた人の一人だと思いますが、私は、お世話になる小学校